蘇芳集

前うしろ

青山　丈

春の雪見てゐるうちは降つてゐる
裏からも入れる神社牡丹の芽
独活食べた日を何となし書いておく
女の子だけでブランコ揺れてゐる
前うしろ人が歩いて涅槃かな
三月の電子レンジがちんと鳴る
桃の日の花屋の桃の花を見る

春を待つ

八木下　末黒

大寒や花新しき墓ひとつ
大寒の花なり赤く犇めきて
大寒の縄文樹林もの思ふ
大寒や古墳の朝日昇りけり
貝殻の地層ぶ厚く雪もよひ
臘梅が日向のひかり集めけり
昼食べて寝つ転がつて春を待つ

初鳩

吉田　幸敏

初鳩よオリーブの枝落とすなよ
大過なくこの日となりぬ若菜籠
人日の句会の朝の爪を切る
人の輪の伸びては縮むさいと焼
青写真大口真神降臨す
青竹を割ると鉈研ぐ春隣
どの枝も空を忘れず風生忌

風花

小川美知子

倒れ込みたき残照の枯蓮
金ぴかのもの売る露店枯深し
皆に会へる日やはらかい冬帽子
歩くために松過ぎの街歩きけり
歩いて行つて探梅のはじめの木
寒林とは向かうから人来るところ
風花かと風花かとすぐ消える

橋を渡れば

木内憲子

一陽来復親しきは夜空なる
身ほとりの紙筆一切年歩む
あらたまの身を反らしては鳥を見き
冬麗といふほどほどの佳き日かな
愛日の鳥が旋回してみする
誰彼と笑つてゐてもなほ寒し
橋を渡ればあたたかきかもしれぬ

うつろ

小島みつ如

臘梅匂ふ瑞枝さん逝きうつろ
窓開き二日の陽射し眩しめり
駅伝の応援みなへお年詞も
おほらかな裸桜よ忌を修す
コート脱ぐわれ掠れ声仏事なる
会話なくかぶら蒸し食ぶ海も凪
ネックレスの解けちる音寒昴

一灯

清水裕子

翔つ鳥の紺より碧く冬の空
妖怪のやうな森の樹雪くるか
句を詠まな森の起伏を懐炉抱き
手袋の中の中指むづ痒し
思はざる人との出会ひ切山椒
一灯のこぼるる茶房枯るる中
除夜詣天水桶の底に星

信濃行

下平直子

除夜の湯にうつらうつらとしたらしや
山里の静けさに覚む初明り
初空や信濃の嶺々の匂ひ立ち
日を受けて嶺々しろがねの淑気かな
屠蘇ふふみいつしか父の齢超ゆ
きらきらと初日の卓の茹玉子
笛高く山の駅発つ初電車

寒椿

冨田正吉

老人に綿虫蹤いて来る不思議
つはぶきに風の出入りのありにけり
一徹の男なりけり寒椿
海光の明るさにあり寒椿
嬉しさはちゆうぐらゐなり鴨の数
死ぬまでの時間をおもふ竜の玉
これ以上黄色にならぬ石蕗の花

それなりに

野路斉子

喰べて喰べて桜見にゆく日の為に
それなりに杖持つ花見とふ企画
屋上の春の花壇は空のもの
ぺんぺん草と云ふ他知らず名は知らず
見て聞いて納得オリーブの花を
わが齢われと疑ふ万愚節
逝く春の天窓明り見て飽かず

門松

別府優

探梅の靴の埃を叩くかな
門松の立ちしばかりを通りけり
先ざきの光をたどり恵方道
ふかかいな夢を引きずる七日かな
手作りの箸を揃へて小豆粥
石垣へ蔓の張り出す成人日
戸袋を寒夕焼へ掃いてゐる